

「自ら考えて、

判断して、

行動できる力」をはぐくむ

伊集院理子



最近のテレビのニュースでは、耳を疑うような恐ろしい事件についての報道が行われない日がないの

では…と思うほどです。私たちが子どものころには、たまに怖い事件があつても、それは自分たちには関与しない特別なこととして心の隅に置いておくことができました。しかし、現在は、いつ自分の身、自分のごく周囲にいる人の身に降りかかってくるかもしれないことがあります。

ていかなければなりません。

個人面談をしていたときのこと、ある一人の親から質問を受けました。「今、知らない人にはついていかない、ということを伝えているだけではすまない世の中になっている。顔見知りの人でも、何をされるかわからない。しかし、知人も疑え、ということを、小さい子どもに伝えていくことはどうなか。子どもの安全を守るために、そういうことも配慮していかなければいけないのだろうか。先生はどう考えるか」という内容でした。思つてもいなかつた質問に、「人を疑うようなことを子どもに教えることは望ましいことではないと思う」というよ

うなことを曇昧に伝えてはみたものの、自分が口にした言葉がごくあたりまえな説得力に乏しいもので、親が求めていたことに対し充分に応え切れていなかつてもどかしさが深く残りました。

そのときは充分伝え切れませんでしたが、少し落ち着いて考えてみると、こんな世の中だけれど、人を疑うことから始めてしまつたら、何も生み出せないのでないか？ どんな世の中でも、やはり、周りに存在する人を信じることからしか子どもたちの安心、安定は生み出されない。そのことを、もっと伝えることができたらよかつたのにと深く反省した次第です。

さて、「危ないを知る」というテーマについて考えを巡らしているうちに、子どもたちにとって「危ないを知る」前に、まず「安心を知る」「安全を知る」ことが大事ではないかという考えに至りました。園生活が安全で安心な場となるためには、園内へ

の出入り管理、固定遊具の点検といった生活環境の整備・配慮といったハード面にとどまらず、そこで子どもたちが安心して自分らしさを發揮して生活することができるようにしていくことが、とても大事だと考えます。

なぜならば、ハード面が完璧であつても、その中に子どもたちをじつとさせておくわけにはいかないからです。園においては、活動の主人公は子どもたちで、子どもたち自身が自分の身体を使って環境にかかる中で、いろいろな身体の動きを試してみる必要があります。そうした行為を通して、うまくいったり、いかなかつたりもたくさん体験しながら、自分自身で判断して身体の動きや行動を調整していくようになつていくことが、まず大事です。

そのためにも、園は、遊びの中で、子どもが安心して自分を試しながら活動できる場となつていることが何よりも必要なことでしょう。そのことを抜きには、子どもたちの安全は確保されないのでないか

と考えます。

私たちの園で保育を公開するとき、参観者からよく受ける質問は、「園庭の遊具の周りに保育者がいなかつたが、事故はないのか?」「園庭の高台の部分は、子どもたちしかしなかつたが、それで大丈夫なのか?」「お遊戯室で、子どもたちだけで子どもたちの背よりずっと高く積み木を積んで、そこに乗っていたが大丈夫なのか?」といったものです。現場においては、「事故があつてはならない」ということは鉄則であり、それは、現場で子どもたちを守りはぐくむ私たちが真剣に追究しなくてはいけないことです。

しかし、事故があつてはならないからといって、危ない物、危ないことから、子どもたちを囲つてしまつたり、子どもたちが試してみる前から、「積み木は何段までしか積んではいけません」「保育者のいないところでは、固定遊具は使つてはいけません」という大人サイドのルールを子どもたちの中に徹底させていくことは、子どもたち自身が自分で危ないことを感じたり、危ないことを避け、危なくなない方法を探していく機会を奪つていくことになるのではないかでしようか。自分で試してみて、自分の身体と心で「どうしたら、安全か?」を感じることが、幼児期にはとても重要だと考えます。自分の身体を使って試してみて、「自ら考え、判断し、行動できる」力をはぐくんでいくことが、自分の身を守れる子ども、自分の身だけではなく周りの人の身についても考えられる子どもにつながっていきます。

次に、子どもたちの事例を挙げ、自分の身体を使つて自分で考えて調整するようになつていく子どもたちの姿を見ていきます。

A夫は、園に入る前の体験の少なさが見てとれるようで、とても動きがぎこちなく、脚力も目立つて弱い子どもでした。四歳児の春、園庭の高台のロングハウスの上に、保育者と数人の子どもたちで登つた

ときのことです。ほかの子どもたちは、さつさと登つて、一番上に座つているのに、A夫は、三段目ぐらいの所で、もう腰が引けて動きが止まつてしまつていました。すると、B子がすつとログハウスの上から降りて、A夫の一段下に位置し、「B子がいるから大丈夫だから」と言つて、A夫が安心してもつと上の段に登れるよう助けようしてくれました。B子にそう言われて、A夫もおつかなびつくりですが、一番上に手が届く所まで到達することができたのです。でも、自分から「もう、ここでいい」と言つて、上の段に座るまでには至りませんでした。

自分の力と相談しながら、自分の身体の動きを調整して、自分なりに挑戦して上を目指したA夫。それを支えたのはB子の行動でした。一段下に誰かがいてあげたら、A夫が落ちないと思つて安心するだろう…とB子は自分で判断して、そういう行動をとつてくれたのです。

ときのことです。ほかの子どもたちは、さつさと登つて、一番上に座つているのに、A夫は、三段目ぐらいの所で、もう腰が引けて動きが止まつてしまつていました。すると、B子がすつとログハウスの上から降りて、A夫の一段下に位置し、「B子がいるから大丈夫だから」と言つて、A夫が安心してもつと上の段に登れるよう助けようしてくれました。C夫は一度「こうしたい」と思つたら、何を言われても、泣いたり叫んだりしてその思いを何としても行使しようとするような子でした。C夫としては、「もっと遊んでいたい」という思いから、朝から新聞紙で剣を作ろうと思つていたことを思い出して、防災頭巾はかぶらずに、新聞紙を手にして「新聞紙をかぶる」と主張しました。

子どもたちを迅速に避難させなくてはいけないという状況で、担任はC夫のことはT・T（ティーム・ティーチング）の保育者に任せて、子どもたちの誘導を優先させました。T・Tの保育者は担任の動きを察知して、残されたC夫にすぐにかかわってくれました。T・Tの保育者が「逃げよう」と何度も誘うと、C夫は自分から「ちょっと待つて！ 考え

たときの一人の子どもの姿です。地震が起きてその後火事が発生したという想定で、各自に防災頭巾をかぶらせて、園外まで避難するという訓練でした。C夫は一度「こうしたい」と思つたら、何を言われても、泣いたり叫んだりしてその思いを何としても行使しようとするような子でした。C夫としては、「もっと遊んでいたい」という思いから、朝から新聞紙で剣を作ろうと思つていたことを思い出して、防災頭巾はかぶらずに、新聞紙を手にして「新聞紙をかぶる」と主張しました。

る！」と言つて、その場にしゃがみました。

み取れます。

りに歩み寄つてどうにかしようとしていることが伝わってきて、T・Tの保育者は少し待つてみることにしたのです。C夫は、しゃがんで考へるという間を得て、「やつぱり行く」という結論を自分で導き出しました。C夫を励ましつつ移動する道すがら、

T・Tの保育者は防災頭巾をかぶるようにC夫に伝えますが、C夫は簡単には頭巾をかぶろうとしませんでした。そのC夫を変えたのは、五歳児のD夫の言葉でした。「あつ、あの子、防災頭巾、かぶつていない！ 危ないからかぶらないとだめだよ」。すぐにはかぶろうとしないC夫に、D夫は何度も声をかけてくれました。そのうち、「やつぱりかぶる」と言つて、やつと頭巾をかぶつてC夫は自分のクラスの列に加わったのです。

この事例から、そのときの状況を受け入れ、自分なりに判断してそこに参加していく子どもの姿が読

最初の事例のような、ごくごく日常的に展開されている一つひとつ積み重ね、子ども同士のやりとりが、子どもたちの「自ら考え、判断し、行動できる」力に何よりもつながっていくのだと考えます。二つ目の事例は、日常とは少し違う防災訓練の日の出来事でしたが、その中でも、子どもたちなりに考へる余地を与える保育者の働きかけが、モデルになる行動をしながらの年長児の働きかけが、年少の子どもの「自ら考え、判断し、行動できる」力を引き出していったのだと考えます。また、そのようなことを可能にしたのは、園の職員の連携体制に負うところが大きかったといえます。このような特別な訓練のときだけではなく、日常的な職員同士の連携が、子どもたちの安全確保のために必須のことであることも、この事例は教えてくれています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)